

日本ビクター-STL-650

正価 72,000円



回路構成:

なかなか数多い特長を備えています。まず、終段は 15M-P19 PP と OTL 用に設計された低内部抵抗の新種管を用いて意欲をみせています。

本機のプレーヤ部には同クラスの他社製品にみられない2つの特長を備えています。

その1つは新方式のオートプレーヤを使用していることです。レコード演奏とともに自動的にピックアップアームが元に戻り、モータが停止する機構です。付属のレコードセレクターを使用すれば好みの場所からのプレーが可能というわけです。またスリーピングスイッチなるものがついており、レコードをききながらおむれるという結構さです。つぎにはビクターで開発されたマグネチック形パーフェクトピックアップを使用していることが注目されます。他社の4機種がクリスタルかセラミック形を用いているのに比して万全のかまえというところでは

更にはエコー装置に先べんをつけたビクターとして、モノラルでもステレオ感が得られるフェイズ・スキッタ

外観:

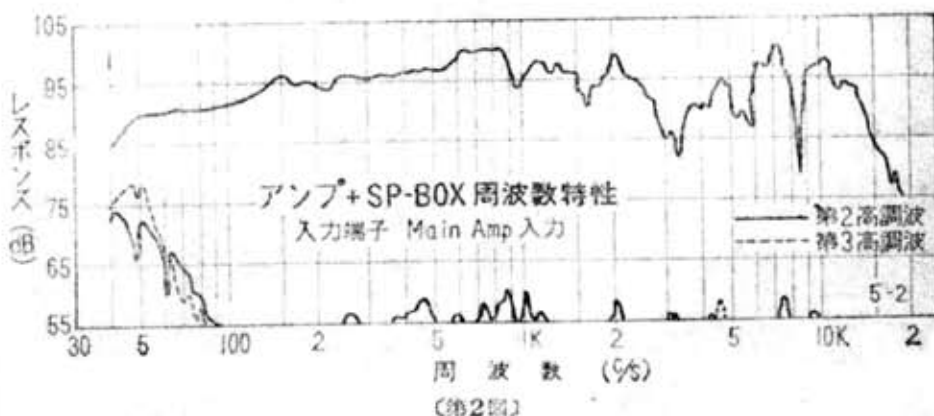
今回測定を行なった中で最もブラツクスともいえるセットです。本格的なステレオとなれば、この程度の価格になるのは、本機の備える数多くの特長からうかがわれます。

前面にはツマミを一つも配さず、スツキリした感じを与え、ビクター電器を一目で印象づけるデザインです。

左からプレーヤ、ラジオ部そしてレコード用のスペースと、かなり複雑な回路を、極めて巧みに美しさを保たせているのは、さすがといえます。

ラジオ部はエコーインジケータ付きの MW-MW 回路を最上部に、真中に MW-SW、そして下段にビクター独自のトーングラフが配され、電器には珍しいチューナ部のパッチカル・シヤシを実現させています。後部から見ると、左側にメインアンプがスピーカーと同居し、中央に垂直に取付けられたラジオ部シヤシがみえます。実際に使用に当たっても、プレーヤと各調整つま

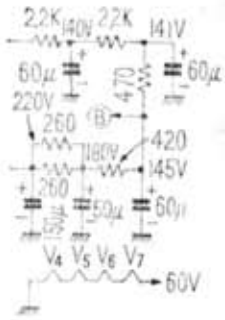
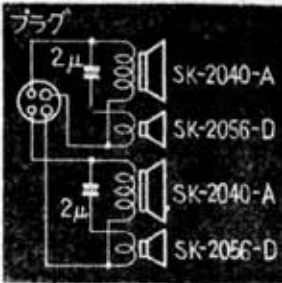
みが非常に近い場所にあることも、便利なことはいうまでもありません。



市販ステレオ電蓄の音響特性実測

STL 650 の定格

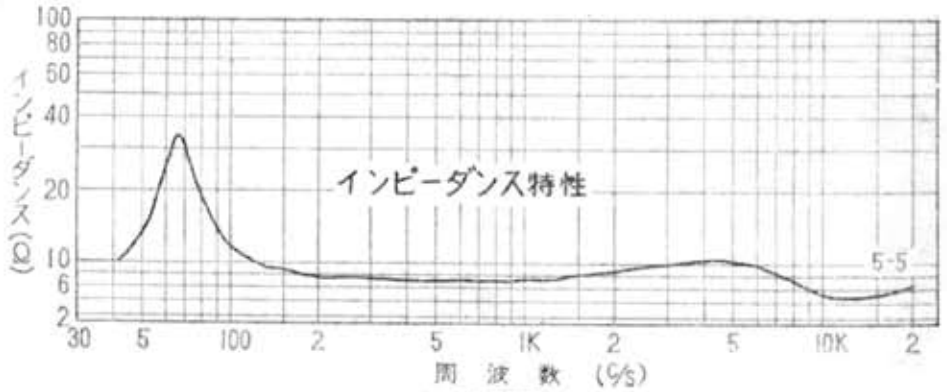
エーコ装置付アンプ部 使用球…21球 4石 出力…5W(無歪)×2.8W(最大×2) 消費電力…132W 大きさ…高830×幅107.4×奥41.2mm 重量…26kg
 ステレオオートプレーヤ部 パーフェクト・マグネチック・ビツクアップ LP(ダイヤ針)、SP(サブアイヤ針) 針圧5gr 4スピード・シンクロナス・コンデンサモータ 20cm ターンテーブル 消費電力…7.5W(50c/s)、9.5W(60c/s) 重量 3.4kg
 スピーカ部 20cm スピーカ2個 5cm 高音用スピーカ2個



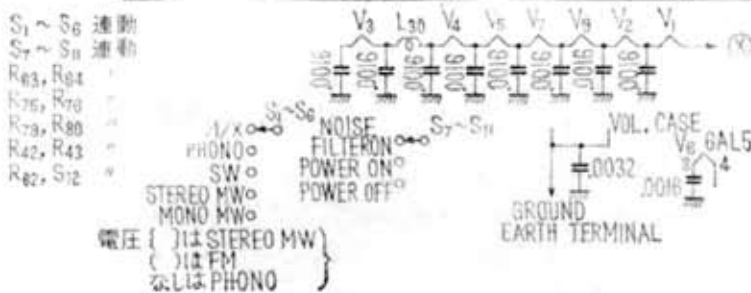
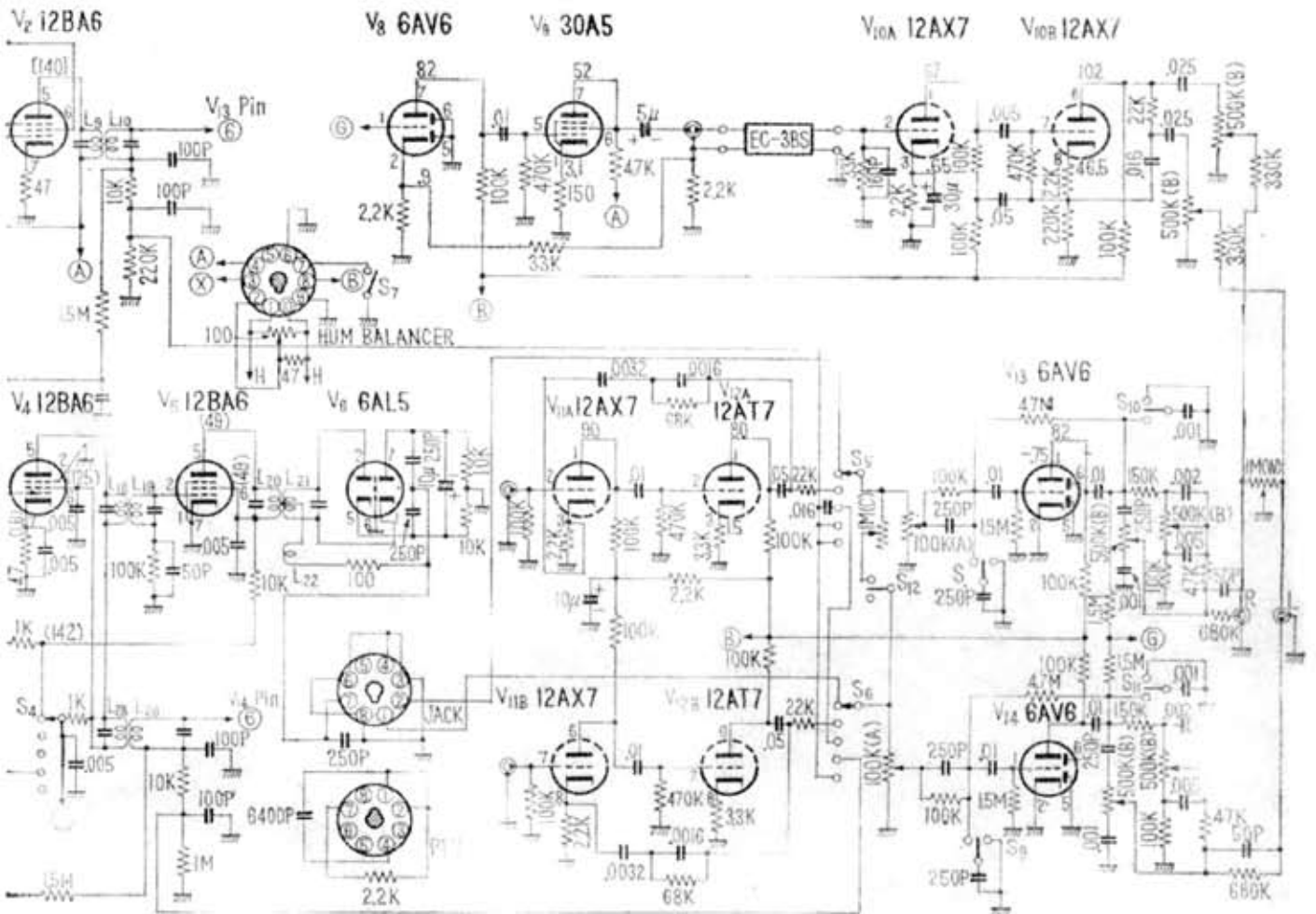
(第7図) スピーカ接続図

り、全体として実用上十分な性能を発揮するものと思われるセットです。

※ 六 号



(第5図)



(第9図) ステレオチューナ部回路図